

第3話 十八の鍵



時計を見ると、午前一時だった。

出雲橋いずもばしの裏道で、ひとりの青年が暗い舗道たたずに佇み、松井まついのタクシーに向かって、ごく控えめに手をあげた。誰だれが見ているわけでもないのに、人目をはばかるような手のあげ方で、松井は車を停とめながらそれとなく辺りに目をやった。やはり、他に人影はない。住宅街と地下鉄の車庫にはさまれた寂しい一本道の途中だった。

「ああ、たすかった」

青年は車に乗り込むなり声をあげ、ひと呼吸おいてから、「新宿まで」とよく通る声を響かせた。「新宿のどちらまで」と松井がバックミラーのぞを覗くと、

「オールナイトの映画館なんです、ちよっと待ってください、ええと——〈第三キネマハウス〉です」

青年はスマート・フォンの画面を確かめながら、

たどたどしく映画館の名前を告げた。画面の明るさがその顔を照らし、一見、青年に思えたが、あるいはとうに三十を超えているかもしれない、と松井は思いなおした。

「こんな時間に映画を——」

そんなことを訊くのは野暮であると承知の上だったが、松井は話の糸口をつかみたくて、あえてそう云^いってみた。

「ええ」と男は屈託なく快活に答えた。「そんなつもりじゃなかったんですけど」

男の話しぶりに、松井はひとまず安心した。

自分にはこれまでそうした経験はなかったが、同僚たちのあいだでは、「こんな時間にこんなところでどうして」というような客を乗せたときは、一応どんな客なのか見定めておくべし、という鉄則があった。まずもって、地に足の着いた生きたお客様であるか、生きていたとしても、どこことなく血なまぐさい気配や切羽詰まったような息づかいをしていないか、「ひととおりの確認しておいた方がいい」と、たびたび聞かされてきた。

しかし、ミラーごしとはいえ、上から下まで見定めるのは決して行儀のいいことではない。何よりそんなことに気をとられて運転がおろそかになつてはなおさらよくない。それに、松井には一瞥いちべつでそのひとがまともな客であるかどうかを見きわめる能力がそなわっていた。

それで云うと、その青年は——いや、青年の風情をのこしたその男は、いささかくたびれた様子ではあったが怪しい感じはしなかった。ただ、ひとまず糸口はつかんだものの、そのまま話をつづけたものかどうかと見計らっていた。

すると——、

「今日は一日歩きまわって疲れてしまったんで、どこかで眠りたかったんです」

男の方からそう云ってきた。

「ああ」と松井はすかさず相槌あいづちを打ったが、男がどういう意味でそう云ったのか、しばらく言葉を反芻はんすうするばかりで呑み込めなかった。もしかして、タクシーの中で眠ろうというのか。最初はそう思ったのだが、どうやら「こんな時間に映画を」と

訊いた松井への返答のようだった。つまり、男は映画館の客席で眠るのが目的らしい。

「一日中、歩きまわるようなお仕事なんですか」

松井の問いに、男は「ええ」と即答し、「でも、今日は仕事が休みで」と、あわてて取り消すように身を乗り出した。「前々から計画してきたことを、ついに実行したんです」

声だけ聞いているとやはり青年のようだ。そう思いながら松井は運転から気を逸そらさないよう前方を注視した。ようやく暗い住宅地から幹線道路へぬけ出て、見通しがよくなったところで、「新宿方面」の標識が確認できた。

「——ということは一日中、歩きまわるのを、前々から計画していたわけですね」

カーブを切りながら話に戻ると、

「そう——やっと、ひと仕事終わったんで」

「今日はしかし、天気がよくなかったでしょう」

「ああ、ずっと曇ってましたね」

男はわずかに声のトーンを落とした。

松井は夜を走るドライバーなので昼間のうちは

あらかた眠っている。だから、天気のこととは夕方のニュースで知ったままでなのだが、「いまにも降り出しそうな雲行きでしたね」とニュースの受け売りで話を合わせた。

「僕はね」と男は小さく息をついた。「ホントに雨が苦手で、ちょっとしたトラウマというか何というか——」

「何か嫌な思い出でもあるんですか」

「いや、思い出というか、雨が降るたび事件が起きるから——」

「事件？　ですか」

松井はそのとき右の眉まゆがぴくりと動くのが自分でも判わかった。一日中、歩きまわって、しかも「事件」などと云うからには、あるいは刑事か何かだろうか。見た感じはそんな風情ではないのだが——。

「運転手さんは、名探偵シユロって知ってます？」

「はい？」

松井は男が正確に何と云ったのか判らず、「ごめんなさい、もういちど云ってください」とミラ

—ごしに男を見た。男は窓の外にときどきあらわれる深夜営業の店々を見るともなく見ている。

「名探偵シユロです。御存知ないですか」

「さあ」と松井は首をひねった。「すみません、それって有名な方なんですか」

「いや、御存知ないならいいんですが、僕はそのシユロっていう探偵の——なんだろう——シユロは映画の方の名前なんですけど——」

「あ、もしかして俳優さんですか」

「ええと——まあ」

「そうでしたか、存じ上げず失礼いたしました。いや、私こう見えて映画関係の知り合いというか、お客さんがいらっしやるんで、そっち方面については少しばかり明るいです。でも、名探偵シユロってというのは初耳ですね——」

*

「いや、マイナーなB級映画だから」

本当はそうではなかったが、男は松井の話をさ

えざるようにそう云って、それ以上、説明するの
が面倒になった。

「お察しのとおり、僕は役者で、シユロっていう
探偵の役をやってるんです」

そういうことにしておいた。

いや、あながち間違いでもない。むかし——も
うずっとむかしのこと、父親の勧めで子役をして
いたことがある。映画にも何本か出た。いまは違
う。いまの仕事は探偵だ。それなりに名の知れた
探偵のつもりだったが、映画に明るいと云ってい
るタクシーの運転手が、「シユロ」という名前に
何の反応も示さなかった。

そんなものである。そもそも、「名探偵」など
と呼ばれ出したのも、マスコミや取り巻きたちの
半ば冗談でしかない。ただ、少なからぬ数の事件
を解決してきたことは事実で、そうした事件のあ
らましが小説になり、さらには映画化までされて、
それなりに話題になった。

もっとも、いまでこそ「シユロは本名で棕櫚と
書くのです」と彼は云っているが、本当のところ

はじつは誰も知らなかった。あくまで彼をモデルにしてフィクション化した際のニックネームで、それがいつのまにか、彼自身の呼び名にもなって、誰かに「シユロ」と呼ばれると、自然と振り向くようになった。

「勉強不足ですみません」

松井が申し訳なさそうに云うのを聞いて、シユロはめずらしく、もう少し話してみようかという気になった。

今日の自分は饒舌だ。いつもはここまで話さない。なのに、どうしておれの口はこんなに話したがっている？

「今日は撮影が休みだったんです」シユロのふたつの瞳ひとみに街灯が一定の間隔をおいて映り込んだ。

「それで、一日うろろうると東京を旅していたんです」

「あ、もしかして、東京に出ていらしたばかりですか」

「いや、そういうわけじゃなく」

シユロはミラーに映る松井の顔をたしかめた。

声だけでも充分に窺^{うかが}えたが、申し分なく善良そのな人物だ。

これは探偵の癖である。最初の印象で、そのひとのとりあえずの性向を読み、それが事件の現場であれば、このひとは犯人なのかそうではないのかといった核心^かに関わる判断をするときもある。第一印象は重要だった。その人物を知り尽くすことももちろん必要だが、余計な情報を知る前に直観で判定するのも、探偵にとってはひとつの修煉になる。

「僕は生まれも育ちも東京です」

シユロはひとまず松井を善良な人物であると判断すると、窓の外の暗い街路に視線を戻して話をつづけた。

「ただ、引越し魔なので、東京の中であつちこつち住むところを変えてきました——」

あるいは、自分は喋^{しゃべ}りすぎているかもしれないと思った。しかし、なぜかシユロは話がとまらない。

「今日は、むかし住んでいたアパートをひとつひ

とつまわっていたんです」

*

「ああ」と松井は話を呑み込みかけたが、しかしそれで一日中歩きまわっていたというのは、（尋常ではない）と呑みかけたものが喉のどにつかえた。

「最初に住んだアパートから、いま住んでいるマンションまで、じつに十九回も部屋を変えてきたんです」

やはり尋常ではない。松井は不審と好奇心の板ばさみになりつつ、「よく覚えていましたね」と思ったことをそのまま口にした。するとシユロは、「鍵かぎがあるんです」とどことなく得意げな口調になった。

「いまの部屋の鍵とは別に、数えてみたら十八個あつて」

「なるほど」

本当は何がなるほどなのか松井にももうひとつ判らなかつた。どういうことだろう。これまで住

んできた部屋の鍵をすべてとってあるということか。

いや待て、と松井は思いあतった。そういえば、自分もこれまでに三回ばかり部屋を変えていて、以前住んでいた部屋の鍵を、もう使わないと判っているのに引き出しの奥にしまつてある。

「その十八個の鍵って、たぶんこの世のどのドアもあけられないんですよ。本当のところは知らないけれど、建前上はそういうことになっているはずで——」

今度は松井がミラーの中のシユロをまじまじと見た。一瞬、目が合ってしまったのだが、じつにいい目をしている。仕事柄、お客さんの目を見て見当をつけることがあるのだが、このひとは自称俳優さんで、しかも探偵を演じていると云っている。まあ、そういうひとに限って、じつは空き巢の常習犯だったりするのだが、それこそマイナーなB級映画だったら、そういう展開もありうるだろう。十八の合鍵あいかぎをジャラジャラいわせ、一日中歩きまわって、次から次へと主あるじのいないアパート

の部屋に勝手に入り込む――。

「どんな映画なんです?」と松井は思わずそう訊いた。

「え?」とシユロはいきなり話が映画に戻ったことに戸惑っているようだったが、「ああ、だから探偵が主人公で」と答えたのに、「いや、そうじゃなく」と松井は言葉をかぶせた。

「今日、これから御覧になるのはどんな映画なんです?」

「ああ」とシユロはそこで声色が急に激よどんだ。

「まあ、どうせ眠っちゃうんで、なんでもよかつたんですけどね、すごくむかしの日本映画で、怪盗の話です。探偵じゃなく」

「怪盗?」

松井は思わず声がうわずり、内心、自分で自分に大きく舌打ちをした。タクシー・ドライバーというものは、こうしたときに動じてはいけなものである。たとえ、うしろに乗っているのが凶悪犯であったとしても、なにごともしなかつたかのよう
に冷静さを保ち、しかるべき通報なり何なりを背

後の客に気づかれぬよう遂行しなくてはならない。声がうわずって相手に悟られてしまうのは初步的なミスだ。

しかし、シユロはどこ吹く風で、

「じつは、僕の父は知る人ぞ知る怪盗として活躍していたんです」

事もなげにそう云って、感慨深そうに頷いた。うなず

「ええと」と松井は慎重に言葉を選んだ。「怪盗っていうのはあれですか、あの——怪人二十面相とかの？」

尋ねながら思い出していた。

自分がこうしてタクシーの運転手になったのは図書館で見つけた『車のいろは空のいろ』がきっかけだった。そして、そのあと夢中になったのが、江戸川乱歩えとどがわらんぼの少年探偵シリーズだった。

そう思つて、いまいちど男の様子をおさらいすると、青年のようでありながらそうでもなく、自ら「探偵を演じている」と云ったかと思えば、怪盗の息子であると告白したり。そのうえ、「どのドアもあけられない」などとうそぶいて、十八個

の鍵をポケットにひそませている。

「もしかしてお客さん、まさか怪人二十面相じゃないですよね——」

*

(なるほど、二十面相か) とシユロは顔を伏せてひそかに笑みを浮かべた。

これまでシユロは、自分が引っ越し魔であることを誰かに話すたび、鍵の数を「二十六個ある」と云ったり、「三十八個ある」と云ったり、しいには「五十はくだらないね」などと大ボラを吹いてきた。しかし、今回初めてしまっておいた箱の中から出してくると、鍵は全部で十八個あり、どれも似たような素っ気ない銀色の鍵なのに、手にとるなり、その鍵が差し込まれた錠前の手^て心^こえ、ドアの色、そしてドアをあけたときの部屋の様子までありありとよみがえってきた。

こうした才能が彼を一級の探偵に仕立て上げてきたことは間違いない。が、彼には自らを「二十

面相」に見立てるようなユーモアが欠けていた。

まったく見当違いではあったとしても、「二十面相」というのは面白い。鍵から思い出される十八のアパートと、いま住んでいるマンション、それにいまはもうない生家を足すと、ちょうど二十になる。自分はたしかに二十のピリオドを経ていまここにいます。それは、今日一日、東京をめぐる歩いて訪ねた十八ヶ所の街の記憶が証明していた。ひとつ、趣向があったのだ――。

まずは、いま住んでいるマンションの前に住んでいた下北沢しもきたざわのアパートを訪ね、次はその前に住んでいた代田橋だいたばしの〈幸福荘〉、そして、その次は阿佐ヶ谷あさやの〈三日月アパート〉みかづきといった具合に、時間をさかのぼるように辿たどっていったらどうだろうかと思いついた。

実際にそうしてみると、六つさかのぼったところで、アパート自体がなくなっていた。

念のため、お守りのように十八の鍵はたずさえていたのだが、まさか、その鍵を鍵穴に差し込んで、本当に開かないかどうかと物騒な実験をする

つもりではなかった。足早にねぐらを変えてきた自分の足跡を、ここでじっくり確認しておきたかったのである。

だから、重要なのはそこに住んでいたときの記憶で、いまもそこに建物がのこっているか否かは関係ない。シュロの記憶力のよさは折り紙つきだったが、手の中にのこされた鍵が失われたものより明確に引き寄せた。

まさに、鍵である。

たとえば、十一番目の部屋に住んでいたときに彼は「迷宮入り」とされた事件を次々と解いて、探偵として名を馳^はせた。そのアパートは学芸大学の駅から南へ十分ばかり歩いたところにいまも変わらずある。六畳一間にロフトの付いた部屋——二階のいちばん左端の部屋にいまは別の誰かが住んでいた。そんなことは当たり前のことなのに、あのときの鍵をシュロはまだ持っていて、しかし自分ではない誰かがそこに住んでいる。それがどうにも、もどかしく奇妙なことに思えた。

それ以前——七番目の部屋に住んでいたときは、

マイティ田代^{たしろ}と名乗って手品師をやっていた。といつても舞台らしきものに立ったのは町工場や商店会の宴会の余興だけで、多くは酒場の片隅で見せるテーブルマジックだった。手品はまったくの独習で誰に教わったわけでもない。子供のときからの彼の趣味だった。無論、それだけでは食べていけず、近くの缶詰工場で働き、毎日、缶詰ばかり食べてどうにかしのいでいた。

そんなわけであまりいい思い出はなかったが、手品は彼が探偵になったときに大いに役立った。というより、手品での経験が彼を探偵にしたのだと彼自身もそう思っている。見られたくないものからいかに相手の目を逸らすか。そのとき、どんな目くらましや手技が有効であるか――。

手品というものには必ず種があり、複雑に重ねられたトリックの奥に巧妙に隠された答えがある。そうして手品で養われた「謎^{なぞ}にはきつと答えがある」というシンプルな真理が彼の推理を支えていた。

しかし、さらにさかのぼった三番目の部屋――

江古田の〈溝口アパート〉に住んでいたときは、探偵はおろか手品師になることも彼にはまだ予想外だった。何ひとつ将来のビジョンがなく、二カ月周期であわただしくアルバイトを変えていた。風呂なしの格安アパートだったのをいいことに商店街のはずれにある銭湯に入りびたり——アパートも銭湯もすでになくなっていったが——銭湯で知り合った年輩の男たちとの交流から、酒場で手品を見せる仕事をするようになった。

何がどうなるものか判らない。

「まあ、そんなふうにさかのぼっていたら、こんな時間になってしまつて——」

*

夜空の色をした松井のタクシーは、じきに新宿にさしかかろうとしていた。新宿は東京の不夜城に違いないが、以前にくらべると、「城」のまばゆい光が及ぶ範囲が狭まっている。「じきに新宿」とは云つても、周囲はほの暗く、黒々とした

街路樹が車内に浸食するように深い影を投げかけていた。

松井は運転に集中しながら考えた――。

後部座席の男は、「探偵を演じている役者」と称したが、話が進むうち、あたかも自分が本当に探偵であるかのようなことを云い出した。もしかして、少しばかり頭のねじがゆるんでいるのかもしれない。だから本当は話半分で聞けばよかったのだろうが、松井は探偵うんぬんより、彼が云った「さかのぼる」という言葉に引っ掛かった。

その言葉を松井はなるべく使わないようにしてきたのだ。

男が前々から計画してきたことをようやく実行したと云っているように、松井にもやはりさかのぼるべき記憶がある。いつかそのことに向き合うときが来るだろうと、どこかで思っていた。そう思いながらも、ひたすら夜の底を走りつづけ、どこへ行くかはお客様しだいで、目的地を自分で決めずにいるのは、自分の人生には、お誂え向きあつらむではないだろうかといつかから納得していた。

いや、そんなことを自問することもじつはほとんどなく、ただ何かから目を逸らすようにして、ひたすら走りつづけてきた。

「じつは、私もね——」

ふいに松井は、これまで胸のうちにきつく結ばれていたものが、靴ひもがほどけるように解かれてゆくのを感じた。

話してしまおうか——。

迷うことはない。こうして車中で交わす会話は一期一会のその場限りで、流しでひろったお客様とふたたび出会うことはそうそうない。だから、いまここで、これまで誰にも云わずにいたことを、この男に話してしまってもいいのではないか。

いや、自分は誰かに話したいのだ——。

そんな思いまで立ちあがっていたのだが、松井のタクシーはすでに新宿に到着し、目的の映画館まであと二分とかからないところまで来ていた。

松井は「私もね」と一旦話しかけたことを、

「私も風呂のないアパートに住んでいました」と話をすりかえ、「このあいだ乗せたお客さんがた

またまそっちの方だったんで、ついでに通りかかったら、私が通っていた銭湯も、きれいさっぱりなくなっていました」

そう云って、苦い顔で笑った。

*

本当のことを云えば、どんな映画でもよかったなどと口走ったのは、誰に対してもなく自分自身へのポーズであるとシュロは判っていた。松井に「眠るだけ」となるべく軽々しい感じで口にしたのも、シュロにしてみれば精一杯の演技だった。

映画の上映開始は午前一時五十分である。

そもそも、その映画を観る^みことが、今日いちばんの目的で、十八の鍵をさかのぼる探訪は、あとから付け加えたものに過ぎなかった。というより、自分のこれまでのところをさかのぼってゆけば、最後に父と暮らしたあの屋敷に辿りつく――。

生涯、脇役俳優^{わきやく}に徹し、五百本もの映画に出演した父が築き上げたあの家。

十八の鍵の向こうに、あの家があった。

そして、常に脇役だったシユロの父親が、唯一の例外として主役を演じた映画が『怪盗シルバ』だった。

その映画が、この夜のこんな時間に人知れずひっそりと上映される。〈知られざる名品〉と題された特集上映の日替わりプログラムの一本で、深夜にただ一度きりしか上映されないという情報をシユロはたまたま目にしたのだった。これまで一度もソフト化されたこともなく、父から話として聞かされていたが、シユロも映画そのものを観るのは初めてだった。

だから、その映画で父親がどんな演技をしているのかシユロは知らない。

ただひとつだけ知っていることがあって、探偵になる前——おそらく八番目の部屋に住んでいたときだろう、古本屋で見つけたひとむかし前の映画雑誌に、『怪盗シルバ』のあらすじが紹介されていた。読むなり、「ああ」と失望の声がもれてしまうようなよくあるストーリーで、怪盗は主役

ではあるものの、最後に頭脳明晰めいせいな探偵によって敗北を喫するというオチだった。

じゃあ、自分が探偵になればいい——とシユロはそのときそう思った。それも役者として演じるのではなく、本当に難解な事件を解く名探偵と呼ばれる存在になってみせよう。

あともう少し到着がおそかったら、シユロはそこまですべて松井に話していたかもしれない。

が、窓の外を見るとこんな時間なのに人があふれ、ふと夢からさめたようにも思え、あるいはそういう状況こそ夢の中であるかのようにも思えた。しだいに頭がぼんやりとしてきて、松井の「着きました」という声が聞こえなかったら、そのまま眠りにおちていたかもしれない。

タクシーを降りて映画館の前に立つと、今日一日、いまにも降りそうだった空がついに決壊したのか、シユロの嫌いな雨が降りはじめた。

妙に生ぬるい、言葉をかえれば優しい雨だ。

しかし、雨が降ると事件が起きるといふのは本当の話で、優しく降ろうが、土砂降りであろうが、

かならず雨が事件を運んでくる。何がどうしてそうなるのかは判らないが、シユロがこれまで臨んできた事件のほとんどが雨の降る日に起きた。おそらく、雨が降ると人は心を乱され、つい大それた事を起こしてしまうのだろう――。

そこは新宿のターミナル駅から離れた「小屋」と呼ぶのがふさわしい小さな映画館だった。開館したのはつい最近のようで、こうした陽の当たらない作品をあつめてプログラムを組んでいるところも、どこことなくむかしの映画館を思わせる外観にしても、いちいち館主の気概が感じられた。

ひとつケチをつけるとすれば、むかしの映画館には付きものだったチケットを買う窓口がなく、チケットはロビーに備え付けられたゲーム・マシンのような端末機器によって発券される仕組みだった。すべては機械によって管理され、それゆえ、モニターに映し出された座席表から自由にシートを選ぶことができた。

シユロは「名」がつくほどの探偵であるのに、こうしたことに減法弱く、切符を買うとか、光熱

費を払うとか、そういったことに対して信じ難いほど不器用だった。

しかし、そんな彼であっても、この深夜の上映がとりわけ異例であるとすぐに判った。

端末はインターネットにつながっていて、シユロのように館内で指定をしなくてもネットを使って座席を予約することができる。もし、それが人気のプログラムであれば、あらかじめ席が埋まっているということもあるのだろう。しかし、もうあと五分で始まるのに、『怪盗シルバ』の座席表はひとつも埋まっていなかった。

そんな映画がこうして上映されること、その上映の日がたまたまシユロの休日であったこと、なおかつ、このままいくと、ひとりきりでスクリーン上の父親と対面するということ。

そしてなにより、これまで向き合うことを拒んできた父の仕事をこの目で見てみようとした自分——そのすべてを、あるいは「事件」と呼んでいいのかもしれない。

*

「映画を観たあとに、また乗せてもらっていいですか」

降りしなに思いがけずシュロがそう云うと、

「ええ、もちろん」

と松井は答えた。

「終わるのが三時半だから、そのくらいに電話をします」

「かしこまりました。こちらへどうぞ」

松井は制服の内ポケットを探り、携帯電話の番号を記した名刺をシュロに手渡した。

もし、そのあと長距離の客をひろってしまったら電話があっても断わらざるを得なかった。が、雨が降り出したのになぜか客はなく、この調子なら、件の映画館くだんにいつでも直行できるだろうと近場を流していた。

シュロははたして映画を観終えてどこへ行くのか、十九番目の部屋に帰るのだろうか、それとも

深夜興行をしている別の映画館にでも行くのか。乗車時間がどれくらいになるのかにもよるが、十五分を超える距離であつたら、松井はさつき云いかけたことを話してみようかと考えていた。

この程度のことには「運命」などと云うのは大げさかもしれない。しかし、シユロと名乗るあの男が、役者であるのか、それとも本当の探偵なのか、まずはそのところを見きわめ、仮に本物の探偵であるなら、ひととおりの話を聞いてもらつて、彼女を——あのひとを探してもらおうということも考えられる。これまで、偶然の再会を期待してこの仕事をつづけてきたが、探偵に依頼するという手もあつたのだと松井はいまさらのように扉が開かれる思ひになつた。

いや、本当を云うと、彼が探偵であろうが探偵を演じている役者であろうが、どちらでもいいことだつた。彼が自分に話してくれたように、松井もまた彼に話してみたかつたのだ。

ところが、運命とは気まぐれなものである。

四時を過ぎてもシユロから電話はなく、四時半

をまわったところで、松井は頭を振って忘れることにした。

久しく封印していたあのひとの面影を——車内から窓の外をぼんやり眺めていたあの横顔を思い出し、それでわずかながらでも胸がときめいたのだからよしとしよう。

気をとりなおしたところへ、松井の携帯電話が鳴った。

「はい」と出ると、「もしもし」と耳慣れない女性の声が響いた。

「冬木ふゆきです」

夜の向こうの、ずっと先から聞こえてくるような声だった。